

私はサンディエゴに 34 年、その前はグアム島に 6 年居ましたので、こちらでの生活はもう 40 年にもなり、日本よりこちらの方が長くなりました。

私は若い時から外国と関係のある、例えば貿易だとか旅行業のような仕事につきたいと思っていましたが、その時には、こちらに住むようになるとは全く想像もしていませんでした。

私がかちらに来るようになったソモソモの始まりと言うか、きっかけになったものは、私が 20 代のはじめに東京のカコストロボという会社で働いていた時、当時ベルギーで合気道を教えていた父が交通事故で急に亡くなり、ベルギーまで遺骨を引き取りに行った事でした。

言葉は全くわからず、すべてを周りの人にお膳立てしてもらって行った、初めての外国旅行でしたが、あの時父の亡くなったのがベルギーではなく、例えば日本であったら、その後の私の人生は全く別のものになっていたと思います。

それまでは遠い存在だった外国が急に身近なものになり、貿易等と、ただ漠然と考えていたものが現実の視野に入ってきたものだから、少しは貿易の勉強をしなければと思い、すぐ拓殖短大に入学し、昼は会社に勤め、夜その短大に 2 年間通いました。

これは又偶然と言うか、そんな時たまたま会社の同僚からもらった一冊の本が私を別な方に導いてくれました。皆さんの中には読まれた方がおられるかも知れませんが、それは小田実さんの“なんでも見てやろう”という本です。これはフルブライトの奨学金を貰ってアメリカに留学し、その後ヨーロッパ、中近東、インド、東南アジアを周って日本に帰られるまでの、“一日一ドルの世界貧乏旅行”と言う旅行記です。

私はこの本を読んでみて、一日一ドルなら私にだって出来るかもしれないと思い、いろいろと計画をねり拓大を卒業した後、ヨーロッパへ自転車旅行に出かけました。貿易の仕事をするのなら外国という所を良く見ておかなければならないと思ったからです。

お金がなかったものだから、当時一番安かったロシア経由のルートを取り、ナホトカからシベリア鉄道を利用してギリシャまで全線汽車で行き、そこからフィンランドとアイルランド、アイスランドを除く、当時の西ヨーロッパ全部と北アフリカのモロッコを自転車で周ってきました。ギリシャをスタートした時ポケットには 300 ドルもなかったので、途中スペインのマドリッドとデンマークのコペンハーゲンでそれぞれ三ヶ月ずつアルバイトをし、帰りの旅費もかせがなければなりません。

一年半ほどヨーロッパを旅行して日本に帰り、小さな貿易会社で働いていた時、突然、拓大で一緒だった男から電話がかかってきて、一緒にグアムに行かないかと言ってきました。

なんの計画もなしに行ったグアムでしたが、そこで Yakitori House という店を開き、6年後の1978年にサンディエゴに移って、同じような Yakitori II という店をオープンしたわけです。

今から思うと、私の人生の大きな転機になったのはベルギーでの父の死だったと思います。

もし、遺骨を引き取りにベルギーに行った事と、それに続く小田実さんの本との出会いが、あのタイミングでなかったら、その後拓殖大学に行くような事も、ヨーロッパを自転車で周る事もなかったと思います。

もしそうだったなら、グアムに行くきっかけを作ってくれた彼に会う事もなかったわけです。そして、もし彼に会わなかったらグアムに行く事はなかったし、サンディエゴに来る事もなかったでしょう。

皆さんも、今アメリカに来られ、いろいろな分野で活躍されておられますが、もしあの時あの人に出会っていなかったら、もしあの人あの一言がなかったら、と言うような経験を持っておられるのではないのでしょうか。いつか、皆さんのそんな話をぜひ聞かせてもらいたいものです。

村重勝彦 (Victor K. Murashige)